BACK・FIRE

D.E.A.T.H.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＡＣＫ・ＦＩＲＥ

【Ｎコード】
Ｎ８７９７Ｃ

【作者名】
Ｄ．Ｅ．Ａ．Ｔ．Ｈ．

【あらすじ】
不思議な高校の主人公“欲望の男”龍二や、その他変な奴らの物語。くだらない内容ではありますが、ツボにはまるかも！？生徒は微妙な超能力を使います。

第一話　俺の超能力！（前書き）

若干、下ネタあり！注意！

第一話　俺の超能力！

ここは日本。

それも埼玉。

ああ、彩の国。

埼玉県南部、公立狂気高校。
『きょうき』高校だぜ？
すっげーあぶなそうだよな。

そうでもないけど。

時はもう5月。
この学校にも慣れてきた頃。

「おい龍二！帰るぞ！！」

「ちょっと待て！うっし、ＯＫ！」

俺は提出物のプリントをその場でチャチャっと終わらせ、
先生に提出し、学校を後にした。

ん、自己紹介がまだだっけか？

俺は神田龍二(かんだりゅうじ)。
この物語の主人公だ。えへ。

ココだけの話、
俺は、超能力を使えるんだ。

っておい！落ち着け！！『戻る』押そうとするんじゃない！
冷静になって聞いてくれ。

これは、この高校に入学した次の日の話だ。

「狂気高校か・・・。皆と仲良くできるかなぁ・・・。」

こんなガキみたいな事言ってるのが俺なのだが。

家に帰る途中、突然、妙な光に襲われたんだ。
そして一瞬、目の前が真っ白になって、
それから気づくと俺は自分の部屋で眠っていた。

そしてだ。

俺はこの能力を手に入れたのだ。

“まばたき”をする度に写真が撮れる・・・。

この能力、使い道あんまし無いよね・・・。
けど、この能力を得た日から、この能力、存分に使わせていただきました。

まばたきをしたら
写真が自宅の自分の部屋にある壊れたカメラから勝手に出てくる。

学校で見た、愛しのアノ娘や、クラスのマドンナの写真がドンドン出てくる。

その写真で俺は・・・毎日、している。

何をしているかは・・・分かるよな!?
これ以上書くと、ここに連載できなくなっちゃうからな!!

ま、そんな微妙な能力を持っている俺が、

これからあんな事に巻き込まれようとは・・・

第一話　俺の超能力！（後書き）

まー、第一話はこんな感じですかね。
次回からは、活動的な話になりますので・・・。
どうかよろしくお願いします！

第二話　不良大捜査線！

埼玉県、公立狂気高校。

5月も下旬を向かえ、

どんどん学校に馴染んでいく生徒が増えましたね。

調子に乗った生徒が増えましたよ。

ええ。

しかも上級生は全体的に穏便な人達ばかり。

これじゃあ一年生は粋がりますよ。

そんなある日、俺は、こんな現場に巻き込まれた。

「おい！俺等と一緒にお茶しなぁ～い？」

「一時間だけでいいからさ」

「ダメですっ！これから塾があるんで・・・」

「いいじゃんいいじゃん。塾なんて休んじめーばよ！」

不良の三人組が女子をナンパしているようだった。

その不良は多分、一年D組の奴だろう。

女子は・・・見たこと無いけど可愛いな。

あ、俺はB組な。

周りの皆は見てみぬ振り。

よくないねぇ、皆さん。

「こらっ、お前ら、嫌がってんだろ？」

俺が話し掛けると、ナメた態度でつっかかる不良の一人。

その不良の一人はデブだった。

そして、その後ろのもう一人の不良は金髪リーゼント、もう一人は赤髪だった。

個性的な髪型のヒトタチだね。

「ん～！？何だテメェ？何組だぁ！！？」

「俺か・・・？俺はなぁ・・・」

バコッ！！！

「いってぇえええ！！！」

俺は名前を名乗る前にデブの不良を殴った。

デブの不良は尻餅を着いて倒れた。

「てめー！セコいぞ！！」

「ケンカにセコいもクソもあるか！！おらぁ！！」

尻餅を着いたデブの体をボカスカ蹴りまくる俺。
途中で残り不良二人が突っ掛かって来た。

「おい・・・、上等じゃねーか！！やんぞケンジ！！」

「おうよ寺沢ぁ！！」

赤髪はケンジ、金髪リーゼントは寺沢と言う名前らしい。

「ふ・・・俺の喧嘩センス舐めるなよォ・・・」

そう言って俺は赤髪の顔面を思いっきり蹴った！
女子はポカンとしている。

赤髪は一発でＫＯしたのである。

金髪はそれに怒り、金属バットを取り出して来た。

どう考えても勝てないって！！

「な・・・ちょっと！それはセコいんじゃないですか寺沢さん・・・」

俺は金髪に言うが、

「ケンカにセコいもクソもねーって言ってたじゃないか、クソガキがぁあ！！！」

「うわあああああああ！！！」

「きゃあああああああああああ！！！！！！」

ドグッ・・・！！！！！

そして俺が目覚めたのは・・・

第三話　俺とお前と

「ここは・・・？」

「私の部屋よ。龍二くん♪」

目を覚ますと俺はベットの上に居た。
妙にいい匂いがしていて自分の部屋ではないというのはすぐ分かったが、

まさか

あの俺の助けた女の子の部屋だったとは！

「龍二くん、ごめんね。私のために・・・」

「いや、困ってる人を見てると、ネ。いちちち・・・」

肩や腰が痛くてベットから起き上がれない！

俺の股間のヌシは起き上がっているというのに！！

「あ、無理しないで。今日はウチに泊まってもらってもいいから！」

「へっ、マジ！？」

「うん♪」

なんてオープンな女なんだァ・・・
イッヒッヒ・・・
俺のこの眼のシャッターを切らせてもらうぜ！

「ありがとう。じゃ、もうちょっと寝かせてね。」

「いいよ～ッ」

「あ、そういえば・・・自己紹介してねーじゃん！？」

これ大事だよね

「あ！そうだねェ」

「俺は・・・」

「龍二くんでしょ？神田龍二くん！」

「何で知ってるの！？」

「いっひっひ～♪」

その時は、

『俺のコト、初めて会った時から気にしてたんじゃね！？』

とかバカなこと考えてしまったが、

実際は、俺の教科書から名前を見られただけだった・・・

「私は、滝川美奈（たきがわみな）。よろしく！」

「よろしく。美奈ちゃんだね？」

「うん。・・・できれば苗字で呼んでほしいな。」

「あ、滝川・・・さん・・・だね！？はは・・・馴れ馴れしかったネ・・・」

俺、嫌われてる！？

それから何時間かして

「体が動く様になってきた・・・」

やっとこさ起き上がった俺。

「よかったね。じゃ、もう帰れる？」

お泊りの話は！？

「いや、よく考えたら右足が動かないかな！？」

「あ・・・そう・・・。じゃあ泊まっていきなよ」

よっしゃあ！！
お泊り成功！！！
けど、なんか俺、引かれてねぇ！？

ま、いーや・・・
このチャンス有効に使うゼェ・・・！！

第三話　俺とお前と（後書き）

続きます！

第四話　彼女のモダン

どうも！
神田龍二でぇす！

いやぁ、前回読みました？
凄くないですか、俺。
よく知らない女の子のウチにお泊りですよ。
いやぁ、もう興奮が泊まらないや。

で、今は滝川家の人達と、晩御飯を食べてるところ。

「はっはっは、神田君は面白いなぁ」

「美奈、いい子とお友達になったわね。」

「嫌だなぁ～ママ。お友達じゃないよ！」

友達じゃない・・・！！！！？

“彼氏”って言われて「彼氏じゃないよ！」って否定するなら分かる。
が、“友達”って言われて「友達じゃないよ！」って・・・

やっぱ俺、嫌われてんのか！？

「ごちそうさまでした～」

「神田君、お風呂入っていきな。」

「あ、はーい。」

じゃっぽ～ん

「美奈ちゃんと入りたかったなァ・・・」

と呟いた俺。

仕方ないので風呂場で一発コイた。

「ふぅ～、いい湯だったぁ・・・」

目の前には美奈が。

「あ、龍二君、布団用意しといたよ～」

美奈の目線は美奈自身の部屋の方を向いていた。

「ありがと・・・って、どこ・・・？」

まさか、その目線の先の、そのベットに二人で寝るのか！？否か！？

「押入れ♪」

「へ・・・」

「ドラえもんみたいでいいでしょ？」

「は・・・はは・・・ありがとね・・・」

そして就寝時間が来た。

かわいらしいパジャマ姿で眠る彼女。

押入れからその寝ている姿を覗いて、必死に目のシャッターを切る。

残念ながら、暗くてよく見えないが。

ちくしょー・・・結局何も出来ないまま終わるのか・・・！？

襲うか？

いや、これからの学校生活がダメになってしまう・・・

下着でも盗むか？

犯罪だ・・・一歩間違えたら、ムショ行きだ。

胸でも触るか？

もし、まだ眠っていなかったら・・・

うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！

そして夜は明け、俺は自宅へ戻った。

何も出来なかった・・・

第四話　彼女のモダン（後書き）

なんかシメ悪いですね～。
龍二のダメさにムシャクシャきちゃうかも。
でも、そんなモンですよね・・・実際・・・

最五話　謎の本屋

あ、どーも！

人間のクズ、神田龍二です。

前回は酷かったですな、俺。
見てられないよね、全く。

今日は日曜日。
学校は無いし、部活も入ってないから、家でゴロゴロ。

今週のジャンプを読み返してるところ。

「暇だぁ…」

そう思った俺は出かけることを決意。
どこに行くか…本でも買うかな？

――ブックセンター嵐

こんな本屋あったんだ。
入ってみるか。

「いらっしゃいませー」

女性店員が一人迎えてくれた。

「こちらへどうぞ」

「えっ？」

「どうぞ」

何コレ

本屋って普通はさ、個々で探して買うような店だよね。
なんで店員に誘導されなきゃいけないんだ。
もしかして、この店、物凄く怪しくね？

「あの、俺帰ります…」

「駄目です。どうぞこちらへ」

「駄目って、あなたが決める事じゃないでしょーが！？お客の自由だってーの！」

そういって店から出ようとすると、
扉が開かない…。

「申し訳ございません、お客様。当店は入り口と出口がございまして…」

「ええっ！？入ってきた入り口からは出れないの！？」

「さようで」

「くっ…」

仕方なくその店員へ付いて行く俺。

「お待たせしました。こちらに座ってください。」

「は…はぁ…」

一応その趣味の悪い椅子に座る。

「では、始めますね。ルールは分かりますか？」

「始めるって何をですか！？ルールって…！？」

「ブックバトルですよ、お客様。では始めましょう。」

回答になってねーっつーの！！

“ピッ”

ドガーーーーーーン！！！！

上から目の前にモニターが現れる。

「バトルスタート♪」

そう店員が言うと、そのモニターに自分を元にしたキャラクターが現れる。

「んん！？」

「それはあなたの分身です。彼はあなたが生まれてから、
読んだ本の分だけのパワーを持ちます。あなたの読んだ本の数は
１９２３冊…。」

店員がアドバイス。

俺ってそんなに本読んでたんだ。
漫画ばっかだろうがな…。

「あなたのパワーは１９２３です。」

「で、どうやって操作するのさ？」

「そのボタンを…って、あ！！！」

店員が叫ぶ。

椅子に電流が数秒走る！
うおおおおッ！！！

「負けちゃいましたね、神田さん。」

店員が言う。個人情報が抜き取られたみたいだった。

「代金は初回なんで５００円、で、カードを作っておきますね。」

俺は金を払う。店員はカードを作って渡してきた。

「では、またのご来店を〜」

なんだこの店は…！？

第六話　カルタ幻想

もう6月かぁ。

あ、どうも！
おっすオラ、龍二です！

今日は学校で何故かカルタ大会があるんだ。
時期違いも甚だしいが…

これは、俺のクラスのお調子者、加藤の一言から始まった。

「梅雨長いしさ～、ジメジメして何もやる気しないよなぁ～！
俺の大好きな（サッカー部の）部活も出来ないしさぁあ！！
こういう時はトランプとかウノとかしたいよねぇ～……
でも、トランプもウノも俺苦手なんだったわ…」

「じゃあ何したいの？加藤は」

「そうだなぁ…カルタ！！！カルタだよ！！！！！！！！」

で、加藤はそれを先生に言いに行き、

校内カルタ大会が開かれる事となった。

凄い話だわな。

「じゃあ読みますね～」

体育館で行われたカルタ大会。

ルールというか法式は、体育館に一対一で向き合った生徒達がいて、
体育館の前のステージに読み札を読む奴がマイクで札を読む。
それを俺たちが取るッ…！

それだけのことだ。

俺の対戦相手はD組の丸山健（まるやまけん）。
通称“マルさん”。

「ふっ、マルさん…この勝負貰ったぜ！」
「神田君、僕の実力ナメたら痛い目見ますぜ？」

遂に読み札が読まれる

「“さ”かだちを　している子供に　クロスチョップ……」

“さ”か…！！！
見つけたぜ…

バシッ！！！

「しまっ…」

「残念だったね神田君♪」

「ちくしょっ…」

札はマルさん寄りだった。

今回が駄目だっただけ…

そうだ、次回は…

「“す”てきだね　君の笑顔が　まぶしいよ」

今度は“す”…！！！

これは俺の目の前だ…！！

いただいたッッッ！！！！

バシッ！！！！

「なっ！？」

「ふっふっふ…甘いよ神田君…」

何故だっ！？

奴の強さのワケとは一体！？

第七話　カルタ奉行

カルタ大会もついに終盤。
残った札は残り5枚となった。
俺は札を2枚しか取っていなかった。
奴は４３枚。
どういうことだ！？

「…なぁマルさん。君、ちょっとカルタ強すぎやしないかい？」
俺がそう聞くと
「またその話題かい？僕はカルタの才能があるんだ」
「カルタの才能ってなぁ…？イカサマじゃねぇの？」
「失礼な！カルタにイカサマなんて…あるわけないじゃないか！」
マルさんに怒られた。
確かに疑った俺が悪いな。
「そうだな…。ごめんマルさん。」
「分かってくれればいいんだけど。」

ついに読み札が読まれた。

「“ち”のいろは　赤色だけど　僕は白…」

「はいっ！！！！！！！」

「くそっ！！」

また、マルさんに取られた。

「悪いね、神田君♪」

「マルさん、君、本当は超能力でも使ってるんじゃない？」

俺が冗談交じりにそういうと、
マルさんはハッとして俺の顔を見た。

「実はね、神田君…」

マルさんの衝撃の一言に、俺は驚愕した。

「僕は、超能力が使えるんだ…」

「なっ…！？」

正直ビビった。
俺以外に超能力を使える者がいたとは…

「カルタの読み札が読まれるだろ？
そしたら、自分は適当に手を出す。
すると、僕の手は勝手にその絵札を押さえているんだ。
つまり、手さえ出せば無意識に勝てるんだ…」

なんて地味な能力だ…！！！
俺に引けを取らないッ！
いや、俺のほうがマシかな？

「そうなんだ」

「なんだ神田君？驚かないのかい？嘘だと思わないのかい？」
確かに一般人なら真に受け止めて驚くか、
嘘だとバカにするか、そんな感じの反応をするだろう。
だが、俺にも超能力がある。
「驚かないよ。超能力ってよくあるじゃん」
俺はそんな適当な返事をした。
自分の能力をマルさんに言いたくはなかった。

なぜなら

マルさんの能力は遊戯で発揮できるのだが、
俺の能力は思い出作りとか自慰とかでしか発揮できん。

変態でクソ能力だからだ。

「なんか神田君に話してすっとしたよ。…あ、これは内緒ね」

「オッケー」

そうしてカルタ大会は終了した。

俺とマルさんは互いにガッチリ握手した。

結果は

マルさん４８枚。

俺、変わらず２枚…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8797c/

ＢＡＣＫ・ＦＩＲＥ

2010年10月21日20時55分発行